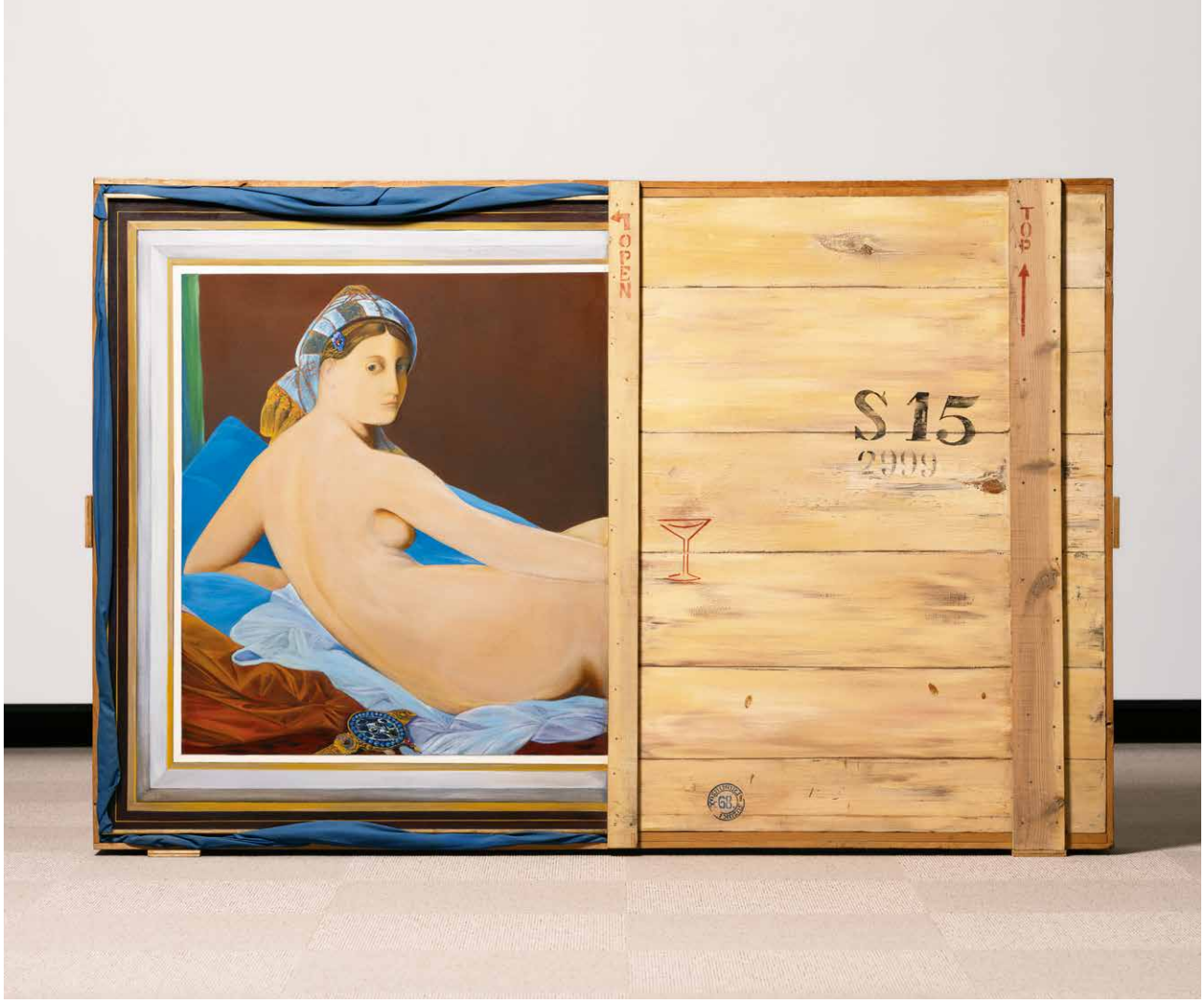
アマリリス
Amaryllis
静岡県立美術館ニュース
THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



鈴木慶則（一九三六―二〇一〇／昭和十一―平成二十二）
《非在のタブロー　梱包されたオダリスク》
一九六八（昭和四十三）年
ミクスト・メディア（キャンヴァス、油彩ほか）
一二五・三×一八九・五×二一・五㎝

「キッチュは、権威として公認された芸術品のイメージを、それ自体素材として対象化する。つまりその手続きは、芸術品のイメージの模倣というより、イメージとしての芸術品のイメージ化＝情報化、といえよう。」

石子順造「キッチュ論ノート」『キッチュ―まがいものの時代―』、一九七一年、ダイヤモンド社

美術品輸送の木箱の半分から、額装された名画が顔をのぞかせている。よく見ると名画も、木箱の表面の記号や数字も、すべて本作の作者である鈴木慶則が模写したイメージであることがわかる。鈴木は、良く知られた芸術品を素材にして、芸術品という情報を作品化した。この手続きは、鈴木が一九六〇年代を通して並走した、石子順造がいう「キッチュ」そのものであった。

（上席学芸員　川谷承子）

No.
153
2024年度 | 春 |

天地耕作雲散霧消

館長　木下 直之

去る二月九日に行われた「天地耕作展」の開会式で、当館館長が「天地耕作について何も知らなかった」と挨拶をしました。開会式では参列者に向かって展覧会の魅力を説くことが通例で、主催者挨拶としては異例ですね。「知らなかった、けれども今は知っている」が大人の挨拶かもしれません。それができない館長がほかならぬ私なのですが、少しばかり言い訳をお聞きください。

天地耕作を名乗った村上誠、渡、山本裕司の三人組は、それぞれ一九五四年、五八年、六〇年の生まれ、同じく五四年生まれの私とは同世代です。それを言ったら、「学年が違う」と誠さんから突き放されました。

さらに三人の生まれた細江町と引佐町（現在はともに浜松市）は、私が生まれた浜松市旭町とは浜名湖を挟んで同じ土地だと思うのですが、古いインタビュー映像で、やっぱり誠さんが「町の人には悪いけど、好きにやらせてもらいます」と語り、「町の人」と自分たち「山の人」との違いを強調していました。私は浜松駅前の生まれですから（母の在所からは屋号のように「駅前」と呼ばれ）、明らかに「町の人」でした。

開会式での私の発言は、同じ時に同じ場所にいながら、なぜ三人の姿が見えなかったのかという驚きの表現にほかなりません。三人の活動は一九八〇年代半ばに徐々に始まり、八八年に最初の「天地耕作」が山中に姿を現し始めました。

そのころの私は浜松を遠く離れ、神戸にあった兵庫県立近代美術館の学芸員でした。同じ八八年の記憶に残る展覧会は「クリスト展」です。クリストもまた、その場限りの芸術を実現させる点で、天地耕作に通じます。しかし、決定的な違いは、クリストが常に世界の耳目を集めたことで、八五年にはパリの古い橋ポンヌフを「梱包」して、その評価を高めていました。

私の勤めた「近代美術館」は、時代区分としての「近代」の美術ではなく、あくまでも「近代美術＝モダンアート」を相手にする美術館でした。クリストはプロジェクト実現のための莫大な資金を、スポンサーに頼らず、自らのドローイングや版画作品を美術市場で販売することで調達していました。どれほど野外で、どれほど突拍子もない企てを行っても、他方でしっかりと美術館や市場などのアートワールドと繋がっていたのです。

静岡県立美術館もまた、八八年に「デュフィ展」、「ブラック展」、八九年に「フランス絵画の三世紀展」を開催しましたから、「近代美術」の紹介に積極的でした。そのころ三人は、当館を会場にした「A-Value 展」に参加しましたから、決して美術館に背を向けていたわけではないのですが、彼らの向かう先はやはり「町」ではなく「山」、それもさらに山奥、奥三河の祭礼や芸能でした。各地に、民俗学者たちが関心を寄せた「花祭」が伝わっています。極寒の時期に夜通し行われる自分たちだけの祭り、観客を必要としない祭りでした。そのありようは疑いなく天地耕作の中に繋がっています。

九〇年代に入ると、私もまた急速に祭礼や見世物に対する関心を高めたのですが（九二年は「大坂の細工見世物」という小さな展覧会を企画、九三年に『美術という見世物』を上梓）、あくまでもそれは近世都市の祭礼であり、花祭の対極、祇園祭や神田祭など都市住民に見せる祭りでした。

三人と私の関心が交わりそうで交わらないこんな話もあります。山本裕司さんの活動の拠点たる渋川に、私は日露戦争の凱旋門を見るために足を運んだことがあります。当時の日本に仮設の凱旋門は林立しても、恒久的な凱旋門は少なく、貴重な残存例なのです（ほかには鹿児島県姶良市の山田凱旋門ぐらい）。しかし、今では忘れられ、ひっそりと残されたままです。

むしろ、消えては現れるものの方が強いのかもしれません。後に何も残さない文化もあれば、残そうとする文化もある。「天地耕作展」は、その双方を考える貴重な機会でした。

テオ・ヤンセン展

会期４月13日（土）～７月７日（日）

全国各地で好評を博してきたテオ・ヤンセン展が、いよいよ静岡にやってきます。オランダ・スフェベニンゲン出身のアーティスト、テオ・ヤンセン（一九四八―）は、ストランドビーストと呼ばれる作品で、世界的に名を知られています。本展では、ヤンセンが作り出したストランドビーストの数々をご覧いただくことができます。

ストランドビースト（以下「ビースト」）は、風を動力源として、歩行を始めとした複雑な動作を行える点が最大の特徴です。海面上昇に脅かされるオランダの砂浜を守る自律的なシステムを構築できないか、という発想を出発点に、一九九〇年代初頭から制作が続けられてきました。この名称は、オランダ語で砂浜を意味するstrandと、生き物を意味するbeestを合わせたヤンセンによる造語です。種類によっては十メートルを超えるビーストが、風を受けて浜辺を力強く歩む姿は、多くの人を驚かせてきました。

この歩行を可能としているのが「テオ・ヤンセン機構」と呼ばれる、ヤンセンが独自に設計したリンク機構です。これにより、足先が前後に運動し、ビーストは前進することが出来ます。歩行が可能になったビーストは、生物のように更なる進化を遂げ、様々な機能を獲得していくことになります。

複雑な動きを見せるビーストたちの身体は、木材や鉄が用いられた一部の作品を除き、無数のプラスチックチューブを、結束バンドで結合する方法で作られています。これらの素材は、オランダでも、建材などを販売する店で手軽に購入できるものです。やや黄色がかったチューブの色味や、チューブ同士の結合部から飛び出した、棘を思わせる結束バンドは、ビーストの外見上の大きな特徴でもあります。このチューブを曲げるなどして加工したものを「細胞」、そして複数の「細胞」が組み合わせられ、各種機能が付与されたパーツを「筋肉」や「神経」、「脳」と呼ぶなど、ビーストの身体は、実際の生物のそれに見立てられています。

更に、ビーストの制作過程も、生物の一生を辿るかのようです。ヤンセンが創造し、生を受けたビーストは、スフェベニンゲンの浜辺で風を受けて活動しますが、やがて作者によって一定の役割を果たしたとみなされると、「死」を宣告されます。そしてこれらの一部は「化石」として保管され、永き眠りに就くのです。本展で展示されるビーストも、この「化石」にあたります。

しかしながら、本展では、ビーストがかつて浜辺で元気に動き回っていた時と同様の姿を、実際にご覧いただくことができます。これを「リ・アニメーション（再生）」と呼びます。会期中は毎日、リ・アニメーションの時間を複数回設けています。

それでは、このリ・アニメーションを行うビーストをいくつかみてみましょう。《アニマリス・プラウデンス・ヴェーラ》（図１）は二体のビーストが前後に連結したような姿を持ち、更に帆船をイメージしたという、大きな帆を備える点が特徴的です。この帆で風を受けて進むこともできますが、「胃袋」と称される、内部に備えたペットボトルに空気を蓄え、動力源として利用することもできます。「テオ・ヤンセン機構」を備えたたくさんの脚が、滑らかに連動する様には、目をみはるばかりです。

図１　《アニマリス・プラウデンス・ヴェーラ》2013年　©Media Force

《アニマリス・オムニア・セグンダ》（図２）は十メートルを超える巨体を誇ります。本種も、ペットボトルでできた「胃袋」を内蔵し、更にこの中に圧縮空気を自ら蓄える仕組みを備えています。加えて、ハンマーで砂地に杭を打ち、自らの体を固定出来るなど、多機能ぶりを誇ります。もちろん、歩行を行うことも可能です。

図２　《アニマリス・オムニア・セグンダ》2018年　©Media Force

このほかにも会場内では、様々なビーストたちを、映像などと共に展示します。緻密な計算のもとに生み出された、独自の造形美をご堪能ください。

会期中は様々なイベントを開催予定です。詳細は当館ウェブサイトにてご確認ください。

（主任学芸員　浦澤倫太郎）

新収蔵品の紹介

開館以来、当館では一七世紀以降の東西の風景画、静岡県ゆかりの作品、国内外の現代美術などの収集方針に基づき、コレクションを拡充してまいりました。二〇二三年度は、購入・寄贈により新たに二〇点の作品を収蔵することが出来ました。

［日本画］

明治時代から昭和時代にかけて活躍した南画家・池田桂仙による《山水図屏風（林和靖・楓橋夜泊）》一点をご寄贈いただきました。

本作の右隻には、北宋の詩人である林和靖ゆかりの杭州・西湖が、左隻には唐の詩人・張継による『楓橋夜泊』に詠まれた蘇州近郊の様子が描かれています。両隻とも、詩にまつわる水辺の情景が、余白を大きく取った、ゆったりとした構図の中に、軽やかな筆致によって表されています。湖畔に咲き誇る梅花と、河岸を彩る紅葉の対比的表現も本作の見どころの一つです。本作は、長きに渡り浜松市に伝わっていました。款記等から、桂仙が浜松に滞在したことが、制作の契機になったと推測されます。

本作の描写内容および制作背景等の詳細については、本号の「研究ノート」をご覧ください。

（主任学芸員　浦澤倫太郎）

［日本洋画］

日本洋画では、川村清雄作品二点を購入、同じく清雄作品一点、長谷川潔作品一点のご寄贈を賜りました。

政治、法律を学ぶため徳川宗家の給費生として一八七一年（明治四）に渡米した川村清雄は、滞米中に画家を志し、まずアメリカで、その後フランス、イタリアに渡って洋画修業を続けました。ヴェネツィア滞在中の一八七八年（明治十一）、清雄の元を徳川家達が訪ねており、清雄により肖像を描かれたことが知られています。家達の教育掛をつとめた旧幕臣の河田熙もその場に同行しており、購入作品《河田熙肖像》は、その折に描かれたものと思われます。清雄の画業初期にあたる貴重な肖像画作品です。

もう一点の購入作品《松竹梅》は、東洋の伝統的画題を油彩で描き、額ではなく軸装に仕立てた異色の逸品。また、ご寄贈頂いた《草紙洗小町》は同題の能の演目を題材にした油彩画であり、こちらも屏風という油彩には珍しい誂えです。両作では幕臣であった清雄の武家文化の中で育まれた美意識と、海外留学で学んだ油彩の技術という、東西美術の融合が試みられています。

長谷川潔は、銅版画技法マニエル・ノワール（メゾチント）の画家として知られています。《オパリンの花瓶に挿した種草》は、長谷川の円熟期にあたる一九六〇年代の作品。漆黒の背景から静謐で神秘的な草花や花瓶のフォルムが浮かび上がります。本作は、ケーテ・コルヴィッツ《虐げられた人たち》とともに版画家二見彰一氏からのご寄贈です。

（主任学芸員　喜多孝臣）

池田桂仙《山水図屏風（林和靖・楓橋夜泊）》明治43年（1910）紙本墨画淡彩

長谷川潔《オパリンの花瓶に挿した種草》1968年　紙、メゾチント

川村清雄《河田熙肖像》1878年頃　板、油彩

［西洋美術］

二点の近代の版画作品をご寄贈いただきました。

一点は、オーギュスト・ロダンによる《ベローナの胸像》です。彫刻家として知られるロダンですが、一八八一年に初めて英国を訪れた際に、画家で版画家の友人アルフォンス・ルグロからエッチングとドライポイントを学び、複数の版画作品に取り組みました。本作は、フランス共和国を象徴する公的記念碑のコンペに応募した自作の彫刻《ベローナ》を、版画で写したものです。ヘルメットと武具を身に着け、前方を見据えるベローナ（ローマの戦の女神）のモデルは、内妻ローズ・ブーレです。彫刻を正面から捉えた版画は、興味深いことに、彫刻とは左右が反転しています。ロダンの代表的な彫刻作品の常設展示館を有する当館にとって、本作は、ロダンの版画家としての側面を示す貴重な一点です。

もう一点は、ドイツの版画家、彫刻家のケーテ・コルヴィッツの《虐げられた人たち》です。作者は、労働者階級の人々への共感や、社会主義運動への参加で知られ、そのためにヒトラー時代には、アトリエやベルリンの芸術家アカデミー会員の地位など評判と名声を失いました。横長の画面中央に横たわる男性、右端の柱に縛り付けられた女性は何れも、当時の社会的弱者の悲しみを主題として描き出した、作者ならではの表現です。本作は、ドイツでも長らく活動された版画家の二見彰一氏からのご寄贈であり、当館の収蔵作家の影響源を示す作品としても重要な一点です。

（上席学芸員　南　美幸）

オーギュスト・ロダン《ベローナの胸像》 1883年
紙、ドライポイント

［現代美術］

現代ジャンルでは十四点の作品をご寄贈いただきました。

中村一美の《ユガテⅦ（Social Semantics 16）》は、三枚組の横幅六メートルの大作です。キャンヴァスに濃淡の緑色の絵の具をしみ込ませた抑揚のある地の上に、エメラルドグリーンやメタリックピンクの強弱がつけられ多方向に走るストロークが描き込まれています。中村は一九九〇年代に入り、絵画の社会性について深く考えるようになり、「社会意味論（ソーシャル・セマンティクス）としての絵画」の制作を始めました。主題の「ユガテ」とは、奥武蔵（埼玉県飯能）の、昔から桃源郷と呼ばれてきた山里の呼称です。現実の暴力や死に満ちた世界と対比させる意図で、桃源郷を主題とするシリーズに取り組んでいます。

中村宏《4半面の反復（12）》2019年
キャンバス、アクリル

中村宏氏から、《4半面の反復》の連作のうちの十点をご寄贈いただきました。「視線」がテーマになっており、少女の顔の四分の一ほどが描かれることで、目に注意が向きます。どの作品もほぼ同様なイメージですが、並べてみると目線など少しずつ異なっています。絵画を複数並べて連続的に見せるという手法は、中村氏が度々試みてきたものでもあります。

向井修一氏よりご寄贈いただいた斎藤智の版画二点は、すでに所蔵していた三点の作品より少し後の年代のものになります。ガラス板に写り込んだ自身の反射像を撮影し、その写真を再度撮影して版画にするというトリッキーな方法で制作されています。視覚と版の問題に取り組んだユニークな作品です。

（上席学芸員　川谷承子／
上席学芸員　植松　篤）

中村一美《ユガテⅦ（Social Semantics 16）》2002年　綿布、アクリル

南画家・池田桂仙と浜松

主任学芸員　浦澤倫太郎

令和五年度、明治時代から昭和時代初期にかけて活動した南画家・池田桂仙（一八六三～一九三一）による《山水図屏風（林和靖・楓橋夜泊）》（四ページに掲載。六曲一双、紙本墨画淡彩、明治四十三年（一九一〇））が当館のコレクションに加わった。本作は、静岡県内各地に書店を展開する、谷島屋書店の創業家に伝来し、現在、会長を務められている斉藤行雄氏にご寄贈いただいた。どのような経緯で本作が同家に伝わったのか不明であったが、このたびの調査の結果、桂仙の浜松滞在が契機となって制作された可能性が高いことが判明した。そこで、本稿では、本作に関する基本情報を紹介するとともに、制作背景や伝来過程について迫りたい。

初めに作者である桂仙の生涯に触れる。桂仙は、ほぼ同時期に活躍していた小室翠雲らに比して、現在、それほど知名度は高くない。しかしながら、その後半生には、関西南画壇を代表する人物として認知されていたことが、当時の各種資料よりうかがわれる。

桂仙は文久三年（一八六三）九月二日に生まれた。名は政昌、字は公美で、通称は勝次郎という。父・池田雲樵（一八二五～一八八六）は、御抱絵師として伊勢国・津藩に仕え、維新後は京都府画学校教諭を務めた。桂仙は幼少時より父に画技を学んだ。母は朱子学者・斎藤拙堂の娘と伝わる。明治七年（一八七四）、父に付いて京都へ移り、谷鉄臣、江馬天江に詩文を学んだ。明治十三年（一八八〇）に、開校したばかりの京都府画学校に入学。明治十九年（一八八六）、京都青年絵画研究会展において《夏山瀑布》で二等賞を受賞するなど、画家としての道を歩み始める。しかし、同年に父・雲樵没後は困窮したらしく、桂仙は家計を支えるため、大阪の高島屋で勤務をしていた時期もあるという。[1]

明治四十年（一九〇七）、第一回文展に出品して以降、同展を主要な舞台として活躍する。大正四年（一九一五）の第九回文展出品作《春杪生芽・雪後寒林圖》（二幅対）は三等となり、平福百穂《朝露》、池上秀畝《秋晴》などと共に、宮内省買上作品となった。翌々年（一九一七）の第十一回文展《武陵桃源》（六曲一双）ではついに特選となった。

大正八年（一九一九）、反帝展色を帯びた日本自由画壇を結成し、翌々年（一九二一）には小室翠雲らとともに日本南画院を設立し、これら二つの組織を主な発表の場とする。昭和六年（一九三一）十二月二十七日に逝去した。六十九歳であった。没後、妻は遺産を京都市に寄付し、これは美術奨励基金として用いられ、京都市による作品購入に充てられた。[2]

残念ながら、桂仙の現存作例については、ほとんど見出せていない状況にある。文展出品作も含め、現状での手がかりは当時の資料に掲載されたモノクロ図版が主で、得られる情報は限られる。しかし、《武陵桃源》やその前後の屏風作品では、両隻に渡り画面が展開する、大画面構図に取り組んでいたことや、大正期の末ごろには、新たに実景に基づいた制作を試みていた傾向がうかがわれる。

次に本作の概要を見てみたい。六曲一双屏風で、両隻とも水墨を基調に、抑制された淡彩が部分的に施されている。本作右隻の「庚戌（明治四十三年）之初夏（旧暦四月）寫」、および左隻の「時客濱松」という款記により、明治四十三年（一九一〇）の四月頃、桂仙が浜松に滞在し、本作を制作したことが示される。この背景については後述するが、本作の制作年代は、桂仙が文展で活躍し始めた頃に当たる。

本作右隻には広々とした水景が展開する。画面右手には懸崖が配され、岸辺には巨岩が水上に向かって屹立する。これらの陸地は、柔らかな筆致を重ねて表されている。周囲には可憐な花を咲かせた梅樹が点在している。岩々の合間の遠景には、高士がくつろぐ家屋が覗く。画面左手では、水上を堤が一直線に伸長し、その上空に一羽の鶴が舞う。これらの描写から、中国・杭州は西湖の風景を描いていることが瞭然である。

第一扇に記された賛文は、宋末元初の画家・銭選が、自作の「観梅図」に題したとされる七言絶句であり、西湖・孤山に居を構えた林和靖のことを詠んでいる。[3]第一句の原文は「不見西湖處士星」であるが、本図においては、「見」の字の下に来るはずの「西湖」の二字が脱落しており、桂仙は詩の後に訂正している。詩中の「両句詩」は林和靖『山園小梅』の著名な一聯「疎影横斜水清淺　暗香浮動月黄昏」を指すと考えられる。本詩は林和靖の遺徳を偲ぶ内容であり、先述した高士は、林和靖その人の姿であろう。

左隻にも、水辺の風景が描かれ、各所に配された紅葉が、画面に彩を添えている。画面左手には丘陵が配され、頂上に層塔を擁する寺院が建つ。その右手上空には数羽の鳥が舞う。画面中央下方には、岸辺に沿って城壁が続き、付近には建物の屋根が覗く。水面に浮かぶ係留された舟の周囲には水流が表されて

《山水図屏風》款記

右隻

（朱文楕円印）「鵞群」

不見處士星／儼然風月為誰

明／當時寂莫孤山下／両句詩成

萬古唫　見下脱西湖二字

庚戌之初夏寫　桂仙逸士昌

（白文方印）「田昌公美」

（朱文方印）「桂僊」

左隻

（朱文楕円印）「鵞群」

月落烏啼霜満天／江楓漁火對

愁眠／姑蘇城外寒山寺／夜半鐘

聲到客船

桂仙逸士作　時客濱松

（白文方印）「田昌公美」

（朱文方印）「桂僊」

おり、河川の景であることがうかがわれる。対岸には、吊るされた漁火が煌々と照らす中、漁師たちが力を込めて漁網を引っ張り上げる様子が描かれる。

第六扇に記された詩文は、中唐の張継による『楓橋夜泊』である。本詩は、日本でも古くから知られ、画題ともなった。画中の寺院や係留された舟、漁火などのモティーフは、『楓橋夜泊』にも詠まれている。上空の鳥は烏と考えられよう。肝心の「楓橋」が描かれていないものの、本図には詩の情景が、明瞭に視覚化されていると言えよう。

改めて本作全体を俯瞰すると、各隻とも画面の対角線を意識し、余白を大きく取って、陸地と水辺が配されている。そして、賛に記された詩や詩人に関連するモティーフがバランスよく布置され、画文の呼応がわかりやすく示されている。春秋の水辺の風景が、左右隻で対比的に表されていると捉えられよう。

次に本作の来歴について見てみたい。これを直接的に示す資料は残っていないものの、桂仙の浜松滞在を裏付ける新聞記事を発見することができた。その『静岡民友新聞』明治四十三年四月六日号に掲載された記事の全文は次の通りである。

●畫伯来遊　這回濱松町の同好者發起となりて南宗派畫伯池田桂仙氏（京都）來遊を機とし、近日畫筵を開かゝ由。畫伯は去一日より利町平野屋方に滞在。汎く需めに應じ居れり。山水花鳥は氏の最も得意とする處なりといふ。

（振り仮名は原文通り、句点は筆者による）

これによれば、桂仙が浜松に滞在したことを契機に、「同好者」の発起により、近日中に画筵、つまり書画会が開かれる予定であった。桂仙の滞在は明治四十三年四月一日からで、場所は利町の平野邸であり、求めに応じて絵を描いていたという。

まず、本記事が述べる桂仙の滞在時期は、本作の年紀（明治四十三年四月）とぴたりと一致するため、本作がこの浜松滞在を契機として制作された可能性が高いと推測される。

そして、記事中に登場する「利町平野屋方」は、明治時代～昭和時代初期に活躍した銀行家・平野又十郎氏（一八五三～一九二八）の邸宅であると考えられる。又十郎氏は掛塚湊の廻船問屋・林家に生まれ、後に貴布祢の豪農である平野家の養子となった。貯蓄組合や貸付事業を興し、明治十八年（一八八五）には現在の静岡銀行へとつながる西遠銀行を設立するなど、当時の浜松経済界の重鎮であった。利町の平野邸は、浜松の代表的神社である五社神社・諏訪神社近くに位置し、広大な敷地を有していた。

一方、連尺町の谷島屋書店は、平野邸から至近距離にあった。同書店は明治五年（一八七二）、浜松で初代斉藤源三郎氏（一八三三～一九一五）によって創業された。書籍販売のほか、浜松を中心とした県内において教科書の供給を担った。更に二代源三郎氏（一八六四～一九二〇）発案による『谷島屋タイムス』（大正七年（一九一八）創刊）の発行でも知られ、近代浜松の文化の発展に大きな役割を果たした。

本作が制作された明治四十三年当時の谷島屋書店の当主は、二代源三郎氏で、初代源三郎氏も存命であった。後に三代当主となる義雄氏（一八九一～一九六五）は、慶應義塾大学理財科に在籍していた。義雄氏と平野又十郎氏の長男・繁太郎氏は旧制浜松中学校の一学年違いで、更に同じ大学で学び、生涯にわたって親交を結んだ。当時の当主同士も既知の間柄であり、桂仙の浜松滞在からさほど離れていない時期に、本作が斉藤家に入ったことは、十分にありうる話であろう。寄贈者によれば、明治四十三年頃に作品を入手したとすれば、二代目の源三郎氏の意向が働いていたのではないかという。

桂仙の画業については、未だ不明な点も多く、本作の位置づけのためにも、更なる作品の発見が望まれる。また、そもそも桂仙が浜松に滞在した理由や、滞在中に開かれた書画会の発起人の正体なども、解明すべきであろう。しかし、本作制作の契機が、桂仙の浜松滞在にあった蓋然性は高く、更に谷島屋書店創業家に伝わった背景には、浜松の名士達の交遊関係があったことも推測される。利町や連尺町といった浜松の中心部一帯では、太平洋戦争時の空襲により、多くの文化財が焼失した。このような戦禍をくぐり抜け、明治時代における浜松の文化史の一端を今に伝える点でも、本作は貴重な存在と言えよう。

1　山元春挙「青年時代の交友」（富田渓仙編『華香墨蹤』、昭和七年（一九三二）
2　「京都市池田桂仙美術奨勵基金ニ關スル規程」（京都市市役所総務部庶務課編『京都市例規類集』より追録第二十一号）、昭和十八年（一九四三）
3　趙琦美編『趙氏鉄網珊瑚』（万暦四十年（一六一二）頃成立）巻十三に、銭選による作として掲載される。

参考文献：
自由画壇編『桂仙遺集』、芸艸堂、昭和八年（一九三三）　※画集『桂仙画謄』と漢詩集『桂仙詩存』からなり、前者に桂仙の伝記が掲載される。
中村精『谷島屋百年史』、斉藤和雄・有限会社浜松谷島屋、昭和四十七年（一九七二）
日展史編纂委員会『日展史』1～5、社団法人日展、昭和五十五年～五十六年（一九八〇～八一）

本の窓

小田原のどか 著
『近代を彫刻／超克する』
講談社
二〇二一年

この本は、彫刻の表現内容や制作技法を論じたものではなく、公共の場にある彫刻がどのように受けとられ、反応を引き起こすのかという、社会における彫刻の在り方について、鋭く切り込んだものです。そもそもそうした彫刻は、日本では近代になって現れたものでした。

公共の場にある彫刻は、設置する側から市民、国民へのメッセージと言えます。恒久的な存在のように思えますが、時流が変われば、彫刻はその場からなくなることがあります。戦時中には、金属製の彫刻は資源として供出されました。あるいはもっと激しい、破壊という行為にさらされることもあります。公共の場にあるからこその、彫刻への反応と言えます。本書は、美術作品の現実的な側面を取り上げた意欲的な一冊です。

（上席学芸員　植松　篤）

思い出の場所

企画総務課　三輪　桂

県立美術館は日本平に連なる緑あふれる丘陵の一角にあり、美術館が建設される前は広大な芝生広場がありました。

子どもの頃、家族や子供会でよく芝生広場に遊びに来ました。芝生に横になってごろごろ転がったり、ダンボールのそりで滑ったり、低木のやぶの中をトンネルのようにくぐって探検ごっこをしたり、木に登ってトムソーヤの気分になったり。転んでも倒れても痛くないので、前転や側転の練習をしたこともあります。芝生広場で食べたおにぎりの美味しかったこと、遊び疲れてあたたかな日の光を浴びながら、芝生の上でお昼寝をしたこと、一日中いても飽きない大好きな場所でした。

しばらくして県立美術館が建設されました。緑に囲まれた自然豊かな場所に美術館ができ、知人がデート（死語？）で訪れたという話も聞きました。私は友人に誘われ、自転車で一時間ほどかけてはじめて美術館を訪れました。ケヤキ並木の緑のトンネルに迎えられ、樹木に囲まれた遊歩道を、彫刻を楽しみながら歩いていった先に現れた、美術館の静かな佇まいに感動した記憶があります。

子どもが生まれてからも芝生広場には何度も遊びにきました。昔よりは狭くなりましたが、それでも思い切り走り回れますし、木登りや鬼ごっこもできます。私が子どものころにはなかったロダン館裏山も整備され、そこから市街の景色をながめて自分の家を探したりしました。子どもとともに静かな美術館内に入ることはハードルが高く、文明展のときに訪れるくらいでしたが、貴重な展示を観ることができ、子どもたちも美術館を訪れたときのことをよく覚えています。

このようにたくさんの思い出があるこの場所で勤務することができ、喜びを感じています。美術館周辺を散歩していると、昔を思い出して懐かしい気持ちになります。多くの人に足を運んでいただけるよう、これからも美術館の魅力を周囲に伝えていきます。

思い切り遊べる芝生広場でジャンプ !!

利用案内

開館時間：10:00～17:30（展示室への入室は17:00まで）
休 館 日：毎週月曜日（月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館）、年末年始
※その他、夜間開館や展示替等による臨時休館を予定しています。
　詳細はウェブサイト等でご確認下さい。

アクセス

◎ＪＲ「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約６分
◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約３分
◎東名高速道路　静岡IC、清水ICから約25分　日本平久能山スマートICから約15分
◎新東名高速道路　新静岡ICから約25分

ウェブサイト：https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002　静岡市駿河区谷田53-2
企画総務課／Tel 054－263－5755　Fax 054－263－5767
学　芸　課／Tel 054－263－5857　Fax 054－263－5742

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

テオ・ヤンセン展出張イベントのご紹介

テオ・ヤンセン展の開催に合わせ、県内各地で展覧会の見どころを紹介します。更に、ミニビースト体験コーナーを設置するほか、素敵なプレゼントが当たるゲームを実施予定です。

※次の会場以外でも開催します。決まり次第、ウェブサイトなどで告知します。

NTT JAPAN RUGBY LEAGUE ONE 2023-24 | Div.1 第16節 LTS presents よつばマッチデー

5月5日(日)

静岡ブルーレヴスVS東芝ブレイブルーパス東京
場所：ヤマハスタジアム（磐田市新貝2500）

浜名湖花博2024

6月1日(土)、2日(日)

場所：浜名湖花博ガーデンパーク会場
　　（浜松市中央区村櫛町5475-1）

公式YouTubeチャンネルで、
展覧会関連動画を配信中です。ご覧ください。▶

新収蔵品展のご案内

会期：4月10日(水)－7月7日(日)

本号4－5頁に記載の新収蔵品は、「新収蔵品展」にてご覧いただけます。
一部展示替えがあり、コルヴィッツ《虐げられた人たち》とロダン《ベローナの胸像》および関連作品は5月19日(日)まで、長谷川潔《オパリンの花瓶に挿した種草》および関連作品は5月21日(火)からの展示を予定しています。

静岡県立美術館ニュース『アマリリス』No.153　編集発行：静岡県立美術館　2024年4月1日　印刷：文光堂印刷株式会社